

# あるものは当たり前 ないものは不足を嘆く



お釈迦さまのお言葉に、「田があれば田に悩み、家があれば家に悩む。牛馬などの家畜類や、金銭・財産・衣食・家財道具、あればあるにつけて憂いはつきない。また、田が無ければ田を欲しいと悩み、家が無ければ家が欲しいと悩む。無ければ無いにつけ、またそれらを欲しいと思い悩む。たまたま一つが得られると他の一つが欠け、これがあればあれば無いという有様で、つまりは、全てを取りそろえたいと思う。そして、やつとこれらのものがみなそろつたとしても、それはほんの束の間で、すぐにはまた消え失せてしまう」（大無量寿經下巻）というものがあります。

私は折に触れてこの言葉を思い起こし、自分の生き方を恥じることです。様々な物を手にしたにもかかわらず、その事を「当たり前」と思い、今ある物への感謝を忘れた日暮らしをしています。また「あれば欲し

い、これが欲しい」と思う事もしきりです。私はある楽器を弾きますが、楽器を思う心にそれは如実に表れています。まさに先ほどのお釈迦さまのお言葉のような生き方を離れぬ私の生きざまがそこにあります。

そうした自らの愚かさを、お念佛の教えを通し徹底的に嘆かれた方が私達浄土真宗の宗祖である親鸞聖人でした。お念佛の教えに遇えば遇うほど自らの愚かさに気づかされていく。その絶望を感じたからこそ、親鸞聖人はこの自分こそが阿弥陀さまの救いの目当てだったという歓びをいただかれたのでした。

一般的には絶望と歓喜というのは対立的概念として存在すると思います。しかし、宗教、とりわけ浄土真宗にはその対立概念が別々ではなく、一つの事として語られる

のです。絶望の淵に立たされた者を救わんとして、法藏菩薩が阿弥陀さまになられ、「苦悩するあなたを捨てたまわづ」として、この私を苦悩の世界から解放して下さるのです。阿弥陀さまとはそのはたらきを名付けたお名前なのです。

## 如來の作願をたづねれば

（阿弥陀様が、「あなたを救う」という願いを起こされた理由をたづねると）

## 苦惱の有情をしてずして

（苦惱する全てのものを捨てたまわづ）

## 回向を首としたまひて

（阿弥陀さまの功德を私に

回し向けることを第一に考えて）

## 大悲心をば成就せり

（私を苦惱を解き放つという

大きな慈悲を完成されました）

『正像末和讃』

どうぞ、朝夕のお参りの折にこのご和讃をお読み下さればと思う事です。